



▲浜宮祭

五月・浜宮祭齋行

宗 像

6月祭事暦

○毎月1-15日 ^{つきなみ}月次祭

1日
午前10時
高宮祭
第二宮・第三宮祭
引き続き
宗像護国神社月命日祭
午前11時
総社祭(浦安舞奉納)

15日
午前10時
高宮祭
第二宮・第三宮祭
引き続き
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社巡拝
午前11時
総社祭(豊栄舞奉納)

風香る五月五日こどもの日、恒例の五月・浜宮祭が、宗像市神湊の浜宮で引き続き、同市江口の五月宮で齋行された。
五月五日早朝、奉仕員一同宗像市神湊の住宅街に鎮座する浜宮へ出向。浜宮には御社殿はなく、石祠で、その御神前に海川山野の味物に加え、「赤飯」「粽」「ガメの葉饅頭」「菖蒲酒など端午の節句を象徴する神饌をお供えし、午前十時三十分浜宮祭を齋行。神島宮司以下神職四名が奉仕し、当大社責任役員、氏子会、地元総代をはじめ神湊地区の各区長をはじめ地元の方が多数参列した。
引き続き、同市江口の五月ヶ丘に鎮座する五月宮へ移動。五月宮も御社殿はなく、大きな常緑樹を依代とする神籬祭場で、その前庭に浜宮祭と同じく神饌をお供えし、午前十一時浜宮祭参列者に加え、江口区の各区長、玄海少年自然の家関係者、地元の方が多数参列する中、五月祭を齋行した。同宮は釣川の河口に鎮座し、海からの浜風が往時の「濱殿」を髣

五月五日早朝、奉仕員一同宗像市神湊の住宅街に鎮座する浜宮へ出向。浜宮には御社殿はなく、石祠で、その御神前に海川山野の味物に加え、「赤飯」「粽」「ガメの葉饅頭」「菖蒲酒など端午の節句を象徴する神饌をお供えし、午前十時三十分浜宮祭を齋行。神島宮司以下神職四名が奉仕し、当大社責任役員、氏子会、地元総代をはじめ神湊地区の各区長をはじめ地元の方が多数参列した。
引き続き、同市江口の五月ヶ丘に鎮座する五月宮へ移動。五月宮も御社殿はなく、大きな常緑樹を依代とする神籬祭場で、その前庭に浜宮祭と同じく神饌をお供えし、午前十一時浜宮祭参列者に加え、江口区の各区長、玄海少年自然の家関係者、地元の方が多数参列する中、五月祭を齋行した。同宮は釣川の河口に鎮座し、海からの浜風が往時の「濱殿」を髣



▲五月祭

宗像を最初に訪れてから十年になるが、「宗像をどう読めば「ムナカタ」なのかと感したのを記憶している。▼古代の人々は、なぜこの地を「ムナカタ」と呼んだのか。紐解けば、現在の宗像の他に、曾肩、曾形、宗形、身形、胸形、胸方等様々なものが出てくる。確かなことは、現在の「宗像」が定着したのは平安中期頃で、時の当大社大宮司が書面で使い統一したことによるというだけである。▼当大社のバイブル「宗像神社史」では、古代祭祀における意義と地形からという二例を挙げています。一つは宗像三宮それぞれに、玉や鏡を神体の形(御神体)として祀ったことにより「身の形」となった。大海命が御身の像(神像)としてこの地に降りられたことにより「身の像」となったというもので、古語において「みは「む」と読み、「の」と「な」は普通により転化して「むなかた」となった。つまり「む(み)のかた」「むなかた」となり、やがて様々な漢字が充てられたとする説。もう一説は、干潟であったという地形から、「空瀉」「沼無瀉」と出たとする説で、これは現在も残る牟田尻、深田、田島という地名からもうなすける。▼現在、平成の大合併により、合併した名をそれぞれ取る不思議な名前が続き々と誕生している。しかし、当地にはどの集落にも通ずる「宗像」というすばらしい名がある。強引に結論を出す必要はないが、宗像で暮らす以上、宗像の由来については、我々も少し知っておかねばならないのでは。

(M.O)



神具・装束 結婚式場調度品
福岡店 千812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
本店 千600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
千811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



髯とさせる心地よい祭典となつた。

祭典後、五月宮すぐ横の当

元来は端午節句の祝祭であるが、今から約六〇年前の当大社の祭事記録によれば、本来の早苗月の信仰に外来の節句が相重なり、中世におけるその祭事では田植神事・田楽に加え、京風の競馬・流鏝馬・真弓(歩射)等も行われ、その様子は秋の「放生会」に對し「五月会」と呼ばれる程の賑わいをみせていた。

五月・浜宮祭とは

御神幸した。現在の浜宮・五月宮いづれも濱殿の置かれた地と推察されている。中世に隆盛を極めたこの祭事も、宗像大宮司家の断絶等により江戸期には中絶されたが、昭和三十八年五月五日三〇〇年振りに斎行され今日に至る。当時を伝える社報「宗像」二十九号(昭和三十八年六月一日発行)には、宗像市郡内の神職らが奉仕し、十二体の神籬が刺し立てられたこと、一五〇人の参列があつたこと、浜宮祭終了後、みあれ祭の御座船と同じく紅白の「吹き流し」を摩かせ、五月宮まで陸上神幸したこと等、当時の様子が記録されている。



大社五月寮で直会が催され、神島宮司より五月・浜宮祭の由緒を交えた挨拶があり、参

列者一同連綿と受継ぐことの大切さを感じつつ苜蒲酒で乾杯。槽の若葉が敷かれた折敷に盛られた赤飯・ガメ煮・臈・粽を古式ゆかしく栗箸でいただきながら、神人和楽の一刻を過ごした。稲の成長を予祝する神事でもあるこの五月・浜宮祭が終ると、神郡宗像では田植えの準備が始まり、一面の水田に早苗が影を浮かべながら夏へと木々も緑を深めていく。

神宮大宮司 北白川道久氏参拜

五月九日、伊勢の神宮大宮司北白川道久氏に、随同行の同宮権禰宜齊藤郁雄氏の両名が参拜された。

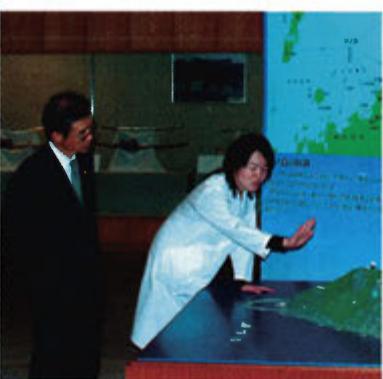


現在伊勢では、来る平成二十五年秋の第六十二回神宮式年遷宮に向けての準備が進められており、全国から崇敬者が押し寄せ、御用材を運ぶ「お木曳き」が週末ごとに行われ大変な賑わいをみせている。

当日は高向権宮司が応接し、正式参拜の後、神宝館に御案内すると、大宮司も九博で一部を御覧になられたとのことで、学芸員の説明を興味深げに聞かれていた。

続いて、前々回の第六十回の式年遷宮で下賜された古材を用いた、神宮所縁の第二宮・第三宮も参拜され、宗像を後にされた。

北白川大宮司は、この日夕刻から福岡市内のホテルで開催される、第五十八回九州各県神社庁連合神職総会出席の為に御来福。かねてより、神宮・天照大神の御子神を奉祀する当大社を是非御参拝されたいと申されており、今回実現した。



谷井博美 宗像市長誕生

原田慎太郎前宗像市長の急逝を受け、五月十四日谷井博美氏が新宗像市長として無投票の初当選にて誕生した。任期は五月二十一日より四年間となる。

告示日の十四日、出陣前の早朝七時宗像大社において必

勝を祈願し、また同九時より宗像市東郷の選挙事務所においても当大社より神職二名が出向し、同じく必勝祈願を執り行った後、市内の青果市場跡で凡そ千人の支持者を迎えての出陣式を終えると遊説に飛び出した。



午後五時過ぎ、対立候補の届がなく初当選を決めた。午後六時より同じく青果市場跡で当選の報告会が開かれ、来賓各位よりお祝いの言葉が述べられると、当大社神島宮司よりお祝いの花束が手渡された。谷井氏は「志半ばで倒れた原田市長の思いを受け継ぎ、伝統・文化を重んじ新しいまちづくりに取り組みたい」と抱負を述べた。
新市長の御活躍を心より御祈念申し上げます。
市民と共に
に創る

四月二十八日(金)正午、WBC世界フェザー級チャンピオンピオンの栄冠に輝いた越本隆志選手が参拝され、勝利奉告並防衛戦必勝を祈られた。

挑戦者は、同級ランキング十七位のルディ・ロペス(メキシコ)でFBS福岡放送が独占生中継します。地元の宗像青年会議所も全力で後援していただきますので皆様ぜひ会場へ足をお運び下さい。

WBCフェザー級チャンピオン 越本選手



当日は、父であり所属ジムの会長である英武氏も参拝。御神前で王座獲得に対する感謝の誠を捧げられ、本タイトルの防衛を御祈念された。
初防衛戦は七月三十日(日)午後二時より福岡市の「マリンメッセ福岡」で開催されます。



お問い合わせは、
☎092(663)3380
〔大会事務局〕まで。

「玄海のリユウ(越本選手)」の初防衛を心よりお祈り申し上げます。

平成十八年度

宗像大社奨学金受給生奉告祭

受給生延べ七三五人に

四月二十九日昭和祭で賑わう御本殿で、平成十八年度宗像大社奨学金受給生奉告祭が

〇名が御神前に集った。当日は、今春入学した新受給生二十名を

含む、宗像・福津両市内より

選定された生徒六十人が保護者とともに

参集。午前十一時からの昭和

祭に参列後、拜殿に昇殿し奉

告祭が斎行され、一同有為な

人材になるよう勉学に勤し

むことを御神前に誓った。

祭典後は清明殿で選定書

授与式と説明会が行われ、神

島宮司から宗像大社奨学金

選定書が生徒



代表に授与され、担当神職よりこの奨学金の歴史、制定目的、規定、受け取り等についての説明が行われた。

その後、生徒一人一人がテーマに沿った作文を執筆し、書き終えた生徒から第一回目の奨学金支給を受け、境内をあとにした。(この作文は『奨学金受給生便り』として紙面で掲載する予定です。)

当大社の奨学金制度は、昭和三十四年の今上陛下御成婚を奉祝して制定され、翌年の昭和三十五年第一期生として宗像市・郡内の中学校出身者(当時は六中学校)に支給され今日に至っている。現在では宗像・福津市内十中学校より



各校二名づつ選定し三年間支給しており、今春の新受給生二十名で延べ人数は七三五人にのぼる。

『郷土を愛し、将来の日本を背負う有為な人材の育成』(宗像大社奨学金受給生規約より)の制定の趣旨にそった社会人になることを切望する。



新奨学生

第四十七期

二〇名は次の通り

- 原 大樹 (大島中卒)
- 早川 里那 (〃)
- 広橋 両汰 (玄海中卒)
- 八尋 将吾 (〃)
- 内田 聡 (日の里中卒)
- 中村 衣里 (〃)
- 吉田 佑希 (宗像中央中卒)
- 荻原 綾加 (〃)
- 秋田 拓 (城山中卒)
- 鍋島絵理奈 (〃)
- 福田 雅人 (河東中卒)
- 伊藤 万里 (〃)
- 伊豆丸和也 (自由ヶ丘中卒)
- 平野 美紀 (〃)
- 花田 拓也 (津屋崎中卒)
- 菊地 彩夏 (〃)
- 濱路 清文 (福間中卒)
- 中武 晴香 (〃)
- 縄田 祥馬 (福間東中卒)
- 中村 勇太 (〃)

ゴールデンウィーク明けの五月十一日、『宗像大社菊花会(千々和正信会長)』が、地元玄海小学校児童へ菊栽培に必要な肥料等の資材を贈呈した。

玄海小学校児童をはじめ大江正徳校長以下各職員、PTAの熱い思いを受け今年も贈呈される運びとなり、贈呈式が同小体育館で行われた。

宗像大社・宗像大社菊花会

玄海小児童へ菊資材を贈呈



玄海小学校では児童の情操教育の一環として、宗像大社菊花会・玄海小学校のボランティア団体「匠の会(大森正史会長)」などの全面協力を得て、全校児童で菊作りを行っており、この資材贈呈も平成十二年より行われ、今年で七年目を迎える。

当日は全校朝礼終了後、同校児童代表へ当大社職員より

菊資材が手渡されると、大きな拍手と歓声が上がった。代表児童が「みんなで力を合わせて頑張る、秋には立派な菊を咲かせます」と大きな声でお礼の言葉を述べた。

続いて、匠の会々長による菊作りの講和があり、贈呈式は終了した。

同小では学年が上がるほど育てる品種もレベルアップしていき、五・六年生では『大輪の三本仕立て』を作る。

秋には校内菊花展を開催すると共に、同時期に当大社境内で開催される西日本菊花大会にも、児童達が丹精こめて作った菊が、例年出品され神郡宗像の秋を彩る。



沖ノ島清掃奉仕活動

年に一度の「沖津宮現地大祭」を前に、沖ノ島を清掃しようと、今年で七回目を迎えた清掃奉仕が四月二十五日、宗像市の町興しグループである「玄海未来塾」(吉武邦彦代表)・宗像大社氏子青年会(吉武邦彦会長)を中心とした約四十名が、沖ノ島に渡り清掃奉仕を行った。

沖ノ島は、島全体が御神域であり、現地大祭が行われる五月二十七日以外は原則として一般の上陸は禁止されており、現在も女人禁制、一木一草一石たりとも持出しを禁じる等の掟が守られている。

当日は午前八時、鐘崎港より「共進丸(宗岡譲船長)」の奉仕で渡島、多少波が高かったが二時間程で沖ノ島に到着した。上陸後直ぐに全員全裸になり海中で禊を行い、沖津宮で正式参拝した後、清掃奉仕に入った。

沖ノ島には一年を通じて当大社神職が必ず一人常駐し、参道の清掃を行っているが、台風等で倒れた木などの撤去は一人で行うことは困難なため、当日は、木の撤去など大掛かりな作業を中心に奉仕頂いた。清掃奉仕は、約二時間行われ、終了後社務所前で直会を行った。



第一回目から参加されている方も、初めての方も、改めて島の荘厳な姿に言葉を失っていたが、事故やケガもなく無事に島を後にした。

今回、初めて清掃奉仕に参加した方が「うまくは言えないが、沖ノ島に来て人が到底及ばない大きな力が存在することを実感した」という話をされていたのが印象深かった。



宗像の山々が新緑に包まれる四月三十日から五月四日迄、第二十三回宗像大社春季奉納盆栽展が、本殿西側の境内で開催された。

この盆栽展は、宗像・福岡市内の盆栽愛好家で組織される宗像大社奉納盆栽会(石松重敏会長)により出品展示される神賑行事で、春秋の年二回開催されている。

三十日午前九時から、盆栽会員、当大社職員の手により会場設

第二十三回 春季奉納盆栽展

春の盆栽展は、藤やさつきなどの花物を中心とした展示構成で、他にも黒松・柏など各会員が手塩にかけた自信作の品々が展示された。

開催期間中は大型連休中ということもあり、参拝者も多く、本殿への参拝の途次、展示の盆栽にしばし足を止め熱心に眺め、折々に会員の出品作品の作

営作業が行われ、会場が出来上がると各地区より出品盆栽が搬入された。

風についての説明に興味深く耳を傾ける姿もよく見られた。

盆栽という一見年輩の方々の趣味と感じられがちであるが、近年の住宅事情や小空間に大自らの造形を表現する在り方に奥深い魅力があり、世代を超えて多くの愛好家が存在する。尚一層盆栽展が発展し、より多くの方々に盆栽を知って頂き、その格調高き日本の美をさらに広めることを念しながら、四日夕刻に盆栽展は盛況の内に終了した。



鎮国寺 柴灯大護摩供
四月二十八日(金)、宗像市吉田の鎮国寺(立部祐道住職)で、恒例の柴灯大護摩供が斎行され、大型連休を間近に控えた陽春の境内には、凡そ五千人の参詣者が詰め掛けて賑わった。

鎮国寺は弘法大師(空海)が中国より帰朝した大同元年(八〇六年)、日本で最初に創建したと伝えられる真言宗最古の寺院であり、七堂伽藍を構えて宗像大社の神宮寺として栄えてきた。寺には弘法大師の作と伝えられる「不動明王立像」(重文)、五仏像(県文化財)、護摩堂などがあり、また梅・桜・ツツジなど花の名所としても有名な寺院である。

新緑萌え快晴の境内において午前十時より身代わり不動明王の年に一度の御開扉法要が執り行われ、午後一時からは境内洗心公園にて「火渡り柴灯大護摩供」が行われた。檜の枝葉で覆われた壇に火が付けられ白煙が立



ち込めだすと副住職以下法縁の僧侶十数名により「般若心経」「不動明王の御真言」が一斉に唱えられ、燃え尽きた炭の上を副住職に続き僧侶、当大社より参詣した高向権宮司が火渡りを終えると、詰め掛けた参詣者も無病息災を祈念しながら次々と渡り終え晴々とした表情で帰路へとついた。

日章興産株式会社

宗像大神御分霊祭斎行

四月二十日東京都中央区銀座の日章興産株式会社で、高向権宮司、神職一名が上京し、出光昭介出光興産株式会社名誉会長ら参列の下、宗像大神をお祀りする御分霊祭が厳守裡に斎行された。



感じさせる建物だったが老朽化が著しく、一昨年九月から解体作業を行い、昨年五月から新ビルの改築工事を進めてきた。地上八階地下一階のビルは、昨年九月に工事を終え、最上階に日章興産が入っており、今回このフロアに神棚を設置する事となった。

当日午前十時、名誉会長に、御子息正和氏・正道氏、遠山特別顧問、橋本総務部長他、関係者が参列。

祭壇に神饌を供え、祓串・玉串を準備、真新しい神殿に神・神宮大麻・宗像大社神璽・宗像大社神符を奉安し、厳肅に無事祭典が執り行われた。



同社は昭和三十七年に出光グループの損害保険、不動産管理部門として設立。社屋のビルは、松竹の「泰聖ビル」を出光興産が引き継ぎ「日章興産ビル」に名称を改めた。東京大空襲を奇跡的に免れ、昭和初期の名残を

(続)

宗の寄物

204

いしいただし



周防大島へ西日本新聞記者の城戸洋氏と行ってきた。周防大島(屋代島)は山口県最東端に位置し、今は本土の大島との間一〇二〇年の大島大橋が架つて陸つづきとなった。

橋の下は大島瀬戸と呼ばれ一〇ノットの流速があり、渦をまいてる。大島は江戸時代毛利藩の領地で、村上水軍の支配地であった。瀬戸内海の島では淡路島、小豆島につぐ三番目に大きな島である。



周防大島 沖家室にて

この島の誇りは、民族学者の宮本常一、作詞家の星野哲郎、近世史の歴史学者奈良元辰世、野球の鶴岡一人の出身地である。民俗学者の宮本常一(一九〇七〜八二)は歩く巨人と言われたが、全国各地を歩き民族調査を行っていた。宮本は「私は最初まず日本全国を見ておきたいと思つて、昭和一四年から思いつくままに各地をあるいた。終戦までの私の旅の仕方であった」と語っている。

和服の布地を黒く染め、それで仕立てた洋服を着、布製の靴をはいていた。編集会議は本郷にある「のせ」という京風の旅館をもつばら使つたが、旅館の女将、女中は宮本の異様な風体を見て、はじめはどう対応してよいか分からずとまどつていた。そして谷川は会議になると更に驚く。「一人で五、六時間ぶつづけにしゃべる」というおそろるべきエネルギーの持ち主だった。彼はそれまで是一年のうち二〇〇日以上出かける民俗調査の旅を一〇年以上もつづけている大旅行家であった。宮本は「私は民家に泊まつた数だけでも八〇〇軒位あるのがね」。谷川は潮水に濡れた海藻のように生き生きとしていた宮本の言葉に、私は全身吸い取り紙のようになって耳を傾けたという。



平凡社に居た谷川は宮本を編集委員の一人に入れて「風土記日本」



周防大島にて

第二十八回 鶴洲吟詠会 春季奉納吟詠大会

四月十五日(土)春季恒例の吟詠大会が、鶴洲会(河野鶴洲宗家)主催で開催され、約七十名の会員が宗像大社清明殿に参集し、自慢の喉を披露した。

一行は先ず本殿で松口月城先生作「宗像宮」を宗家に併せて献吟した。生憎この日は朝から雨模様であったが、一般の参拝者も足を止め、境内に響き渡る会員の朗々とした美声に耳を傾けていた。

献吟後、清明殿で開会式が行われ、永年斯道の興隆に寄与された方々に感謝状と記念品が神島宮司

「日本残酷物語」等を出版した。これらは爆発的に売れた。日本残酷物語の第一巻の圧巻は宮本常一の「土佐橋原の乞食」は、橋の下に住む盲目の乞食が語るもので、多くの人々に強烈な印象を与え、民俗学に対する関心も高めた。後に土佐源氏として一人芝居ともなっている。

表彰された方は次の通り
(順不同、敬称略)
藤森 鶴静
堀江 智洲

歩く巨人



第五三八回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メ切

宗像市 池田 森 龍子

評 降る雨を未より吸ひて地の下に子をあまた抱く竹林やさし
手入れをされずに山里を荒らす竹の害が問題となつてはいるが、これは竹の生命を讃嘆した一首。

宗像市 在 自 増田 武光

評 ダンプより若き女の降りて来て畦の土筆をしきり摘みさき
遅ましさ優しさが同居するダンプ乙女の一面を描いている。

宗像市 田 野 森 甲子

評 疾風に散るは散らして生れ出で若葉かがやく楠の大樹は
生を終え散る古葉と生々発育の若葉のコントラストの妙である。

福津市 星ヶ丘 佐々木 和彦

評 里山にただ雲の影かかりたるのみの景色に心は風ぎぬ
穏やかな心がとらえた晩春の景である。佳吟。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

評 若きらの唄ふを理解したけれど我はなじめず横文字多く
優しくなつた老人達、理解しようとする作者の気持ちに同感の人は多いだろう。

宗像市 田 久 巻 桔梗

評 繞りゐる鯉の誘ひを断りて甲羅干さむか岩めざす亀
鯉の群をかき分けるように泳ぐ亀のさまをユーモラスに詠つて、殊勲。

福津市 若木台 野間 精一

評 手の甲に散りかかりたる花びらは昨夜の雨の湿り帯びるつ
花とは普通桜の花を指す。常に歌ごころを持つ人の繊細な感覚の一首。

福津市 中央 池浦 千鶴子

評 散り初むる桜の下を帰へり来ぬ紺の帽子に花びらのせて
花を惜しむ女性らしく、且つ華やかなうたである。

宗像市 鐘 崎 安永 久子

評 ためらはず知覧のお茶を購ひぬ知覧と言へば重きものあり
私も知覧茶は好きであるが、知覧はまた特攻隊発進の地であることを忘れてはならない。

宗像市 日の里 大和 美由紀

評 華やかなチューリップの花瓶に活け雨のひと日を夫と過しぬ
平和なゆつたりとした時間の流れた一日であつたらう。

宗像市 大 島 杉田 禮子

評 釈迦像に御茶そそぎつつ遠き日の稚児行列など想ひおこしぬ
少子化と共に古き良き時代の行事が一つまた一つと失せる寂しさ。

うきは市 浮羽町 向 則正

評 コンビニの前を掃きふるホームレス俯きしまま謝礼とぞ言ふ
落ちぶれても身に付いた礼、信、義を失わない。それに感動した作者であらう。

福津市 中央 中村 勇

評 み社に合掌の家移築され筑紫の春の雨にけぶれり
素直な詠みぶりがいい。

宗像市 光 岡 佐藤 純一

評 宮地嶽奥の院には神体として祭りあり不動明王
見たままをそのまま詠い、素直すぎるのが惜しい。作者の目と心が欲しい。

福岡市 南区 井田 有久衣

評 はからずも喜寿迎う日の退院に夫の遺影もほのか笑まう
七十七歳はまだまだ若い。夫のためにも歌のためにも健康第一に。

選者詠 雷ひとつ鳴りしをしほに雨やみぬ野にいでくれば大歩みをり
とめどなく雨にうたれて少しづつ紅ひらく庭の牡丹は
光りつつ春の蛇ゆく天折の女流俳人句碑のかたへを



第五一二回 俳句作品集

宗像市 光岡 井上 嘉治
散り急ぐ花は乙女の黒髪に
宗像市 光岡 白土 凌一
燕舞うもう夏来たり暑さ知る

宗像市東郷宗風社俳句会 吉田 杏子
鶯の声の幼き初音かな

無人駅唯一本の山桜 三浦美千代

電光ニュース又繰り返す花の雨 田中 雨葉
木原 房子

芹の生ふ流れやさしき里の川 花田いつ枝

訥弁の叔母生き生きと花だより

編集後記

先月まで制作はゼネラルアサヒ(以下II GA)の関連会社GAトップでしたが、今月から制作もGAに変わりました。GAもトップも福岡市にありますが、企画・制作部門が宗像市アステイにあり、制作は今後そちらで行われます。▼今月号を御覧になられてお気づきでしょうが、それに伴いデザイナーさんも変わりました。なかなかセンスのある方ですし、赤間出身で生粋の宗像インディアンだそうです。期待しております。▼さあ、九日からはいよいよワールドカップ開幕です。サッカーという競技を超えて、世界各国が最も注目を集める大会ですが、日本の対戦相手を見ましたら……果たして胸の八咫鳥は日本代表を導いてくれるのでしょうか。(MO)

宗像大社社務所 発行所 宗像大社

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311(代)
発行人 伊藤佳和
編集人 大塚宗延
制作 ゼネラルアサヒ
印刷 ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円